笹尾墓跡

小淵沢町教育委員会
笹尾墓跡発掘調査団

目　　次

序 …… 1

1 はじめに …… 2

2 笹尾塁跡の地理的景観 …… 3

3 経　　過 …… 4

4 笹尾塁跡をめぐる史料 …… 5

5 層　　序 …… 7

6 笹尾塁跡の概観 …… 7

7 遺　　構 …… 12

8 遺　　物 …… 17

9 ま と め …… 19

編集後記

例　　言

1. 本書は、山梨県北巨摩郡小淵沢町下笹尾に所在する中世城館址、笹尾塁跡の発掘調査報告書である。
1. 本塁跡の名称は、甲斐国志では「篠尾塁跡」、地元住民からは「城山」と呼称されているが、現在広く用いられている笹尾の字を冠し「笹尾塁跡」とした。
1. 調査は、小淵沢町教育委員会が調査主体となり、笹尾塁跡発掘調査団が調査を担当した。
1. 調査団は、上野晴朗、佐藤八郎、服部治則の三氏を顧問として、甲斐丘陵考古学研究会・山梨大学考古学研究会の会員をもって構成した。
1. 本書の執筆は調査員が分担し、文責はそれぞれ文末に記した。
1. 本書中使用している遺構の記号は、Dが溝状遺構、Pが土坑・柱穴などを含むピット状の遺構を示している。

序

小淵沢町は、多くの観光資源に恵まれた、美しい高原の町です。

その一つである史跡「城山」は、下笹尾地区にあって、七里岩台上から白州町をはじめ、南アルプス連峰、富士山などを眺望させる景観な地として、町民の心の憩いの場所となっています。

このたび当町では、甲斐丘陵考古学研究会、山梨大学考古学研究会、および地元下笹尾地区の協力を得て、史跡城山の発掘調査を行い、その報告書をここに発刊いたしました。

今甲斐にあって、中世城館址と予想されるものは優に三百を超えると言われていますが、その大部分は、未調査の分野として残され、そしてそのいくつかは、辺境の地で朽ち果てようとしています。

今回の笹尾塁跡（城山）における本格的な考古学的発掘調査は、時間的な制約があったとは言え、ともすれば文献中心の中世史研究の陰に隠れて、見過ごされがちであった城址研究の領域に、大きな指標を与えるものとして評価されるものと思います。

多くの人々が、学術、学習上における参考資料として活用されますことを、心から望むものです。

小淵沢町では昨年度より、町の開発目標を「太陽と緑と活力の町」づくりにおき、その中で、町内に点在する文化財の保護、保存を積極的に推進させながら、文化に対する住民の意識の向上を図る努力をしております。

そういう意味からも、史跡城山の発掘調査は、住民の文化遺産に接する認識を、再確認してもらう上で、大変意義深いものがあったと言えます。

さらに当町では、文化の町づくりを広く展開し、後世に、より詳細な郷土文化を伝えるため、現在小淵沢町誌の編纂を進めております。

完成は、暫く先になりますが、この調査報告書と併せてご利用いただければと、ご案内する次第です。

最後に、発掘調査にあたり、真夏の炎天下にも拘らず、労を惜しまず調査を進めていただきました調査団の方々、協力を最大限に提供してくださいました地元下笹尾地区の皆様方、ならびに文化財審議委員、町誌編集委員の皆様に厚く感謝申し上げます。

昭和54年3月

小淵沢町長　坂本文雄

PL.1　発掘景観（Ⅱ郭）

1　はじめに

山梨県内における中世城館址は三百余といわれている。「中世」とは、一般的に平安末から戦国期までの約五百年におよぶものである。この時代における支配者階級の経済的・政治的・軍事的な拠点が、中世城館であったといえよう。封建社会の確立に向う時代の推移の中で、支配者の消長も激しい戦国期には、城館の規模や機能をいっそう拡大させることになる。このような歴史の流れの中に存在した中世城館については、近年その解明も進んできている。しかし、県内においては本格的な考古学的調査が実施されたものは極めて限られており、将来に多くの研究課題を残しているというのが現状である。

こうした城館址の実態をながめるとき、今回小淵沢町下笹尾地内の「笹尾塁跡」の発掘調査が実施されたことは、県内の中世城館址の今後の研究に一つの新しい視点を投げかけるとともに、一方では地域の歴史をより鮮明にするという点において大変有意義であろうと考える次第である。

PL.2　塁跡遠景（釜無川河岸より）

ともあれ、今日県内の城館址研究にとり急務とされていることは、一つ一つの城館址の姿を確実に把握することであり、「笹尾塁跡」の調査はこの意味においても、多大な成果をもたらすものと確信する次第である。　　（田代　孝）

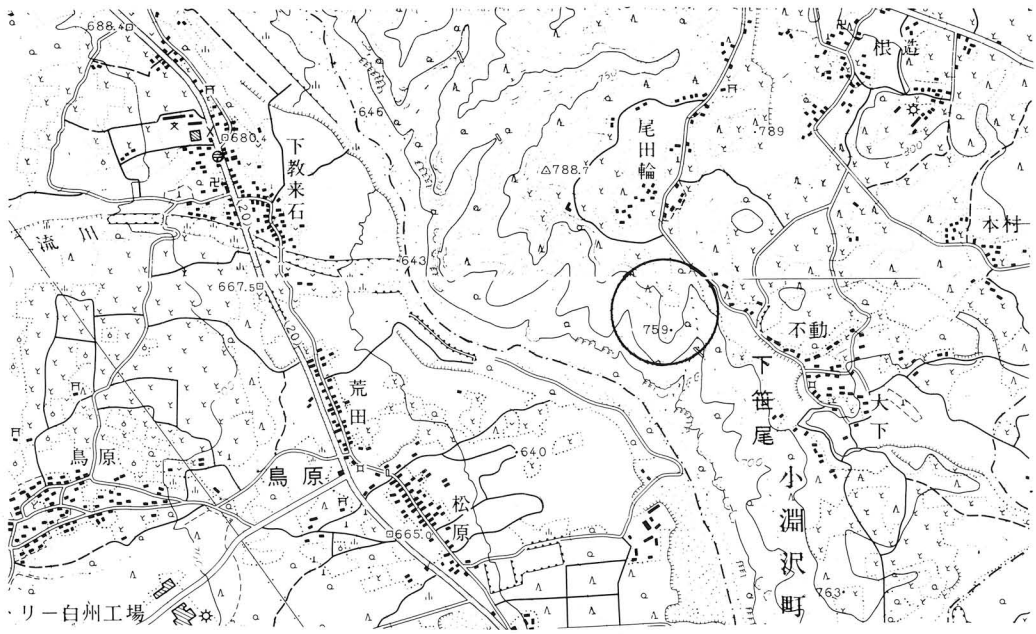


Fig. 1　笹尾塁跡位置図（○印　縮尺1：25,000）

2　笹尾塁跡の地理的景観

笹尾塁跡は、山梨県北巨摩郡小淵沢町下笹尾の字耕地久保に所在する。八ケ岳山麓を南流する釜無川左岸に見られる急崖上に位置している。標高は約760 mほどで、 釜無川との比高は約100m、きわめて眺望の良い場所である。遺跡に立つと眼下に釜無川の流れとその左岸、台ケ原一帯、そして目の前には南アルプスの山々を望むことができ、また遠く東南の方に目をやれば、雲間にかすむ富士の峰とその手前に開ける甲府盆地が視中に収まり、北に転ずると広く裾を引く八ケ岳の山容が落ちついたたたずまいを見せている。

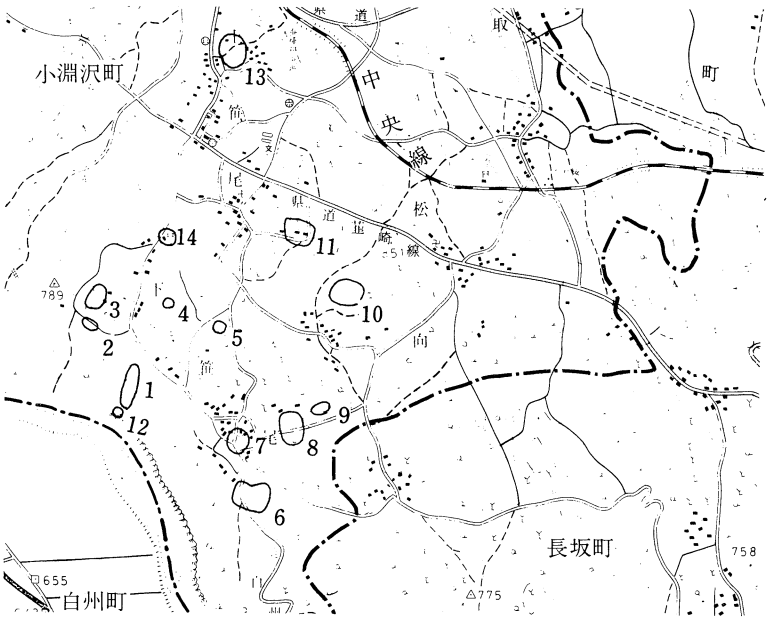
本県の北端に位置する小淵沢町は、甲斐国と信濃国との国境地帯であり、戦国時代には領国経営の上で重要性を高く置かれた地域であったと思われる。とりわけ、笹尾は諏訪口・大門嶺口の警備における要衝で、また後述するように、この辺りは幾度も合戦の舞台ともなっている。

さて、笹尾塁跡の東西両側は釜無川に注ぐ深い浸食谷となっており、このため東、西、南の三方が急崖、急傾斜に面していて、自然の要害の地と言うことができる。また北方に続く尾根状の平地には、尾根を切るように三か所に掘切りが見られ、最も北に見られる掘切りをもって一応の塁跡の範囲(城域)を限定することができるものと思われる。

このような立地環境の中で構築された笹尾塁跡は、尾根上に4つほどの郭より構成されているようで、南北260m、東西 80 mの規模と推定しうるものと思われる。

なお、塁跡周辺の地名・小字の中には、北に「馬場」「馬場の井戸(湧水)」、北東に「御所屋敷」「上屋敷」、東に「上屋敷」「東屋敷」「中屋敷」「御蔵屋敷」「堀の内」などが見られ、この塁跡の歴史的な姿を正しく把握していく上で、重視していかなければならないと思われる。このほかに、加賀美遠光造立の薬師如来が伝えられる寺院や、「富士塚」などがある。また塁跡南端の釜無川に面した急崖には、警鐘を打ち鳴らしたと伝える「鐘つき穴」があり、ここで鐘を打てば対岸の鳥原で太鼓を打って応じたと言う。現在は、くずれている。

(渡辺孝子)



1. 笹尾塁跡
2. 馬場の井戸(湧水)
3. 馬　　場
4. 富士塚(藤塚)
5. 円通寺址
6. 堀の内
7. 御蔵屋敷
8. 東屋敷、中屋敷、上屋敷
9. 正円寺址
10. 上屋敷
11. 御所屋敷
12. 鐘つき穴
13. 島屋敷
14. 諏訪神社

Fig. 2　笹尾塁跡周辺の概観

3　経　　過

本遺跡は、1978年（昭53）8月16日から8月21日にわたって調査された。当地において古くから「城山」と通称されており、また『甲斐国志』には「篠尾塁跡」とも記録されている中世の塁跡である。

発掘調査は、小淵沢町から甲斐丘陵考古学研究会、山梨大学考古学研究会を主体とする笹尾塁跡発掘調査団に委託されたものである。

調査の具体的目標は、遺構、遺物の様相を把握し、その性格や機能、時代性を明らかにすることであった。調査方法としては、本遺跡が良好な遺存状況にあることから、極力その保存につとめ、発掘調査の目的を達成するためにも土塁によって区画された2つの郭を中心としたトレンチ方式による発掘と、遺跡全体の測量調査を実施した。

調査の結果、以下に述べるように、基底部に石積みをめぐらした土塁の状況、柱穴状の遺構や土坑、遺物として土師質土器（かわらけ）、磁器、瓦器などを検出することができた。

調査日誌から見る調査経過の大略は次のとおりである。

《8月16日》

Ⅰ郭、Ⅱ郭に測量用の杭を打ち、トレンチの設定を行う。

《8月19日》

結団式の後、トレンチ内の表土はぎを開始。午後には、土坑、溝状の遺構などを検出する。遺物も遺構中より出土し始める。

《8月20日》

昨日に引き続き、遺構の精査をする。土塁の基底部の石積みからは石臼が発見された。遺物はⅡ郭の方から多く出土し、ピットも検出された。またⅠ郭、Ⅱ郭の測量調査および笹尾塁跡周辺の調査も同時に行い、多くの成果を得た。

《8月21日》

実測を中心に進める。午後は埋めもどし作業に入り、調査をほぼ終了する。　　（渡辺孝子）

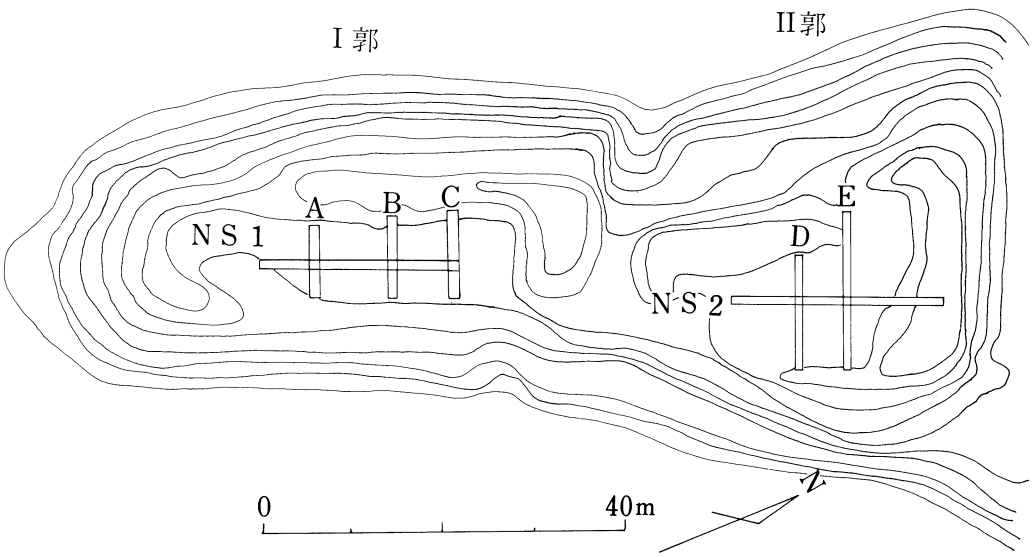


Fig. 3　Ⅰ・Ⅱ郭トレンチ配置図

4　笹尾塁跡をめぐる史料

笹尾塁跡をめぐる史料は内容的に、笹尾塁跡がある時代に何等かの役割を果たした事実または想定される状況を述べたものと、遺跡としての笹尾塁跡を叙述したものとに大別される。

前者に「妙法寺記」、「当社神幸記」、「諏訪神使御頭之日記」、「王代記」、「甲陽軍鑑」等があり、後者には「甲斐国志」、「甲斐叢記」、「北巨摩郡誌」等がある。

さて、「妙法寺記」享禄四辛卯には

> 此年正月廿一日ニ浦殿栗原殿屋形ヲサミシ奉テ府内ヲ引退、御嶽へ馬ヲ入候、去間浦信本モ御同心ニテ御座候。然ハ此人人信州諏方殿ヲ頼候而府中向メサレ候。河原辺ニテ軍アリ。浦衆打負、栗原兵庫殿諏方殿打死被食候。打取頭八百計云々。其儘信州勢ハ皆引被申候。

と見えている。

これは武田氏一族の浦氏、栗原氏等が信州、諏訪上社大祝の諏訪氏と結んで武田氏に反抗した記録であり、次の「当社神幸記」の記事と月、日までほぼ一致する。

「当社神幸記」享禄三年には

> 明年正月廿二日甲州錯乱而、当方篠尾に要害を立候て、下宮牢人衆ささへられ候、彼の城も廿二日夜自落、此方本意之分にて武田方難儀……。

と見えている。

これは本塁跡名がずばり出てくる記録であり、上社諏訪氏から圧迫された下社金刺氏の一党が武田氏と結んで笹尾塁跡にこもり諏訪氏に抵抗し落去した事を述べたものである。この記録に示される状況と前記「妙法寺記」の記事内容との間には密接な関連があると思われる。なお文中「篠尾」とあるのは「笹尾」を示すものである。

「諏訪神使御頭之日記」享禄元年戊子には

> 此年甲州武田方と執合に付て八月廿二日に武田信虎堺へ出張候て轟木の郷の内小東の新五郎屋敷を城に取立候、同廿六日青柳の下のしらされ山を陣場として安芸守頼満嫡子頼隆……。

と見えている。

「同記」享禄四年辛卯には

> 此年一鶚御親父安芸守頼満甲州へ出張候て四月十二日於塩河合戦候て数多打死乍去合戦はちいくさに候……。

と見えている。

これらは武田、諏訪両氏が笹尾塁跡を含む塩川までの甲信境一帯で戦いを交えた記録である。

「王代記」享禄四年辛卯には

> 三月七日曽禰三州縄直大庄ェ陣取。十二月ハ塩川ニテ諏訪衆合戦。スハ三百人討死。……

と見えている。

これは塩川まで出張つた諏訪勢が武田勢に敗れた記録である。

上記の四記録は主として享禄年間の信虎時代のものである。一方「甲陽軍鑑」の記事を要約すると

天文五年十二月　　武田勢海野口城攻略

天文七年　七月　　武田勢韮崎において小笠原、諏訪、村上、伊奈の諸勢と戦って勝つ。

天文八年　六月　　武田勢若神子において諏訪勢と、台ケ原において小笠原勢と戦う。

天文九年　二月　　小荒間において村上勢と戦う。

天文十一年三月　　甲信境瀬沢において小笠原、諏訪、木曽、村上の諸勢と戦って勝つ、等が記されているが、これは後の信玄時代にもこの地域が戦場化した状況を示している。

上記の諸記録は享禄及び天文年間の記事であるが、これは信虎から信玄の時代へかけて甲信境の

諏訪に接する八ケ岳山麓一帯が武田・諏訪両氏の角逐の場となった事を示しており、甲信境に近い笹尾塁跡が直接又は間接にある役割を果たしていた事を示すものと思われる。

次に遺跡としての関連史料を見ると「甲斐国志」巻之四十七古跡部第十には

本村ハ片[illegible]ノ北半里ニ在リ小淵沢、小荒間、両道ノ番所ヘ各壹里上笹尾村ニ遠観番所アリ大井カ森番所ト抗衡ス西方ハ武川筋鳥原ノ亭候ニ相並ヒテ教来石ノ番所ヘモ壹里余皆諏訪口、大門嶺口ノ警衛ハカ嶽ノ西ナリ此墟ハ七里岩上ニ在リ東西ハ深山峨々ト峙チ南モ高岩壁立シ下ニ釜無川アリ北方僅ニ平地ニ接ス湟塁二三重ニシテ甚タ広カラス左右ノ山腹ニモ塁形ヲ存ス本城高キ処五六拾歩南ヘ下ルコト拾五六歩ニシテ洞穴アリ数十人ヲ容ルヘシ鐘ツリ穴ト名ツク此ニテ鳴鐘セハ鳥原ニテ太鼓ヲ打チ相応ズト云伝フ又加賀美遠光カ造立ノ薬師如来ト云ヘルハ墟ノ北三町許ニ在リ

と見えている。

これは江戸時代末の笹尾塁跡の状況を述べたものであり今回及び将来の調査に多く寄与するものである。

「甲斐叢記」は上記「甲斐国志」の記事の要約であり省略する。

「北巨摩郡誌」篠尾村には

城山下笹尾に在り、天文二十一年烽火を挙げたる場所にして筑後の守手勢を引連れて出張し笹尾砦手橋城柵を築きたりと云う、これより北四町に尾田輪馬場の池あり東の馬場江戸山あり長さ二百尺横百八十尺あり其中程に釜一ノ久保あり警鐘を鳴らせし所圓通寺の古屋敷なり此の北に藤塚と称する大塚あり人塚とも云う（中略）城山の西南中腹に釣鐘穴あり上下五六丈又千日穴と云ひ元姫の隠れたる所と云ひ伝ふ今少許の鐘乳石あるを見る。

武田氏の臣笹尾岩見守の居城なりと云ふ文正年度武田の臣小田切某の居城址なりと伝う武田家の祖先新羅三郎甲斐国を領したるとき他家より戦争防備のため臣下某の居城なりしと云ふ。（以下国志に同じ）

と見えている。

これは塁跡の状況と共にそれにまつわる口碑を含んでおり又本塁跡だけでなく周辺部の調査にも寄与するものと思われる。

以上笹尾塁跡に関する史料について述べたが、これらの諸史料は信虎から信玄時代に至る時代における笹尾塁跡の状況とその果たした役割を知る上で貴重な史料であり、今回及び将来の調査において生かして行くべきものと考えられる。

（早川方明）

PL.3　I郭全景（東方より）

5　層　序

Ⅰ・Ⅱ郭に設定したトレンチおよびテストピットによる本塁跡の層序は次のとおりである。

第1層　表土層
第2層　茶褐色土層
第3層　黄褐色土層
第4層　青褐色土層
第5層　灰白色土層

Ⅱ郭およびⅠ郭縁辺部では、この層序がほぼ保たれているが、Ⅰ郭中央付近では第2層直下が第5層の灰白色土層となっており、本塁跡構築時にかなり削平を受けたのか、特異な状況を呈している。

遺物包含層は第2層である。また、この上面に部分的に硬質な個所が確認されているが、この性格についての詳細は不明である。

遺構は第3層以下まで掘り下げて土坑、柱穴、溝などが検出できた。また、礫が集中した個所が第3層あるいは第5層上面で確認されているが、同層自体が礫を多量に含むため、遺構か否か、識別は至難の状況である。

土塁は郭内側の立ち上がり部分のみ調査を実施した。その結果、Ⅰ郭Cトレンチでは表面に礫を多く含んだ硬質層が被覆している様子が確認された。　（室伏　徹）

PL.4　塁跡全景（北方より）

6　笹尾塁跡の概観

本塁跡は七里岩西崖上に突き出した幅80m、長さ400mの舌状台地の先端に占地している。東西に深い谷川が流れているため、尾根を掘り切ることにより、容易に城域を決定できる状況である。

南北260m、東西80mの本塁跡は、北から3～4本の平行する堀、あるいは掘り切りを有し、それらによって4郭に大別されるのである。第2の堀と第3の堀によって区切られる地区は、比高によってさらに2つにわかれる。また、今回発掘調査を行った土塁に囲まれた区域も土塁によって2つにわかれるのである。つまり、全体的には6郭と4本の堀から本塁跡は形成されていることになる。

南の郭より北に向って順にⅠ郭～Ⅵ郭と仮称し、個々の郭を説明することにしたい。

Ⅰ郭・Ⅱ郭

今回調査したⅠ・Ⅱ郭と呼称する郭は、塁跡の南半で、「く」の字状にまがる一番目の堀以南の土塁に囲まれた郭である。この2つの郭は、位置や防備の状況から、本遺跡の主郭と考えられる。

北、西、南に土塁を廻したⅠ郭は、東西20m、南北45mの規模で、南北に細長い。土塁の内側は、平らで、土塁上とは2mほどの差がある。東側には土塁は存在しないが、南側の土塁の東端を「L」字状に北へまげてあり、また斜面には、数段の帯郭を設置してあったようである。また急崖に面した南側の土塁は、幅が非常に広くなっており、あるいはこの上に物見のようなものが作られていたのかも知れない。

Ⅱ郭は、東西24m、南北32mの規模を有し、東側の一部（土橋寄り）から北側、西側に土塁が見られる。郭内は、南側が若干低くなる二段構造をもつようであり、この段差に対応して東側の土塁は終わり、西側の土塁は、屈折する。またⅡ郭の北西隅の土塁の切れ間は虎口（入口）と思われ、

土塁が入れ違い構造をもっており、その内側には広場のような空間をつくっている。

Ⅰ郭とⅡ郭の間の土塁にはさまれた虎口は幅3mで、Ⅰ郭側の土塁は特に高くなっている。Ⅱ郭側の土塁はまもなく終わるが、Ⅰ郭とⅡ郭をつなぐ空間は非常にせまく、しかも東側に土塁がない不安定な構造である。またⅠ郭とⅡ郭の中心線はわずかに逆「く」の字に折れ曲がっている。

Ⅲ郭～Ⅵ郭

Ⅲ郭は第1の堀と第2の堀との中間にある東西65m、南北13mほどの区画で、現在は畑で一部水田となっている。ここは東西に非常に長く、また西端が谷に突き出すような状況となっていることなどから、とりあえず現状から郭と認識されるものの、Ⅲ郭には土塁的な機能のあったことも想定される。

Ⅳ郭は現在水田となっている。東西から深く台地に入りこむ小谷があるが、これが第2の堀と考えられ、Ⅲ郭として存在した土塁の土を用いてこの堀を埋め、水田としたものかと思われる。東西50m、南北30mの地域である。

Ⅴ郭は、Ⅳ郭の北で、Ⅳ郭より2～3m高い平坦部をいうが、現在は雑木林である。内部は緩傾斜をもつ自然地形と思われるが、中央部はやや平坦である。東西30m、南北50mである。また東崖へ突き出した尾根があるが、ここからは、Ⅰ・Ⅱ郭の様子や、谷底から登ってくる道がよく見える。

Ⅵ郭は、「く」の字状にまがる長さ32m、深3mの第3の堀と、直線状で長さ20m、深さ2mの第4の堀によって区切られた、台形状を呈し、東西20m、南北16mで周辺より、Ⅴ郭と同様に高いが、この郭が塁跡の北限と思われる。（八巻与志夫）

PL.5　第1の郭

PL.6　第1の堀の土橋

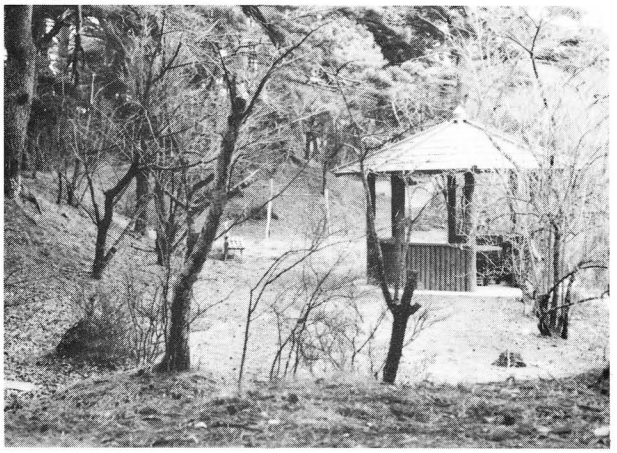
PL.7　Ⅰ・Ⅱ郭間虎口への道

PL.8　Ⅰ・Ⅱ郭間虎口(郭内より)

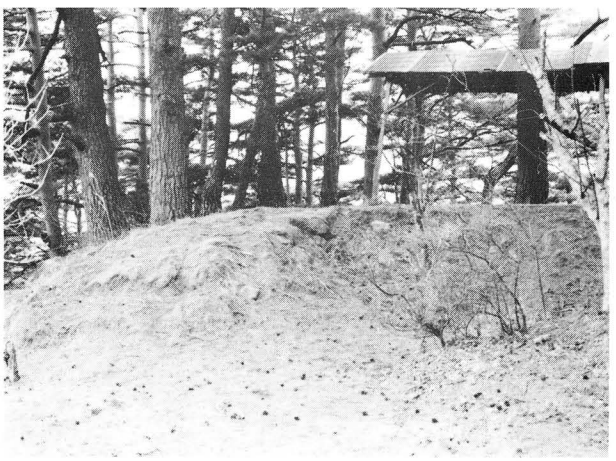
PL.9　Ⅱ郭北・東側土塁

PL.10　Ⅱ郭西側土塁

PL.11　Ⅰ郭入口部



PL.12　Ⅰ郭内全景



PL.13　Ⅰ郭南・東側土塁

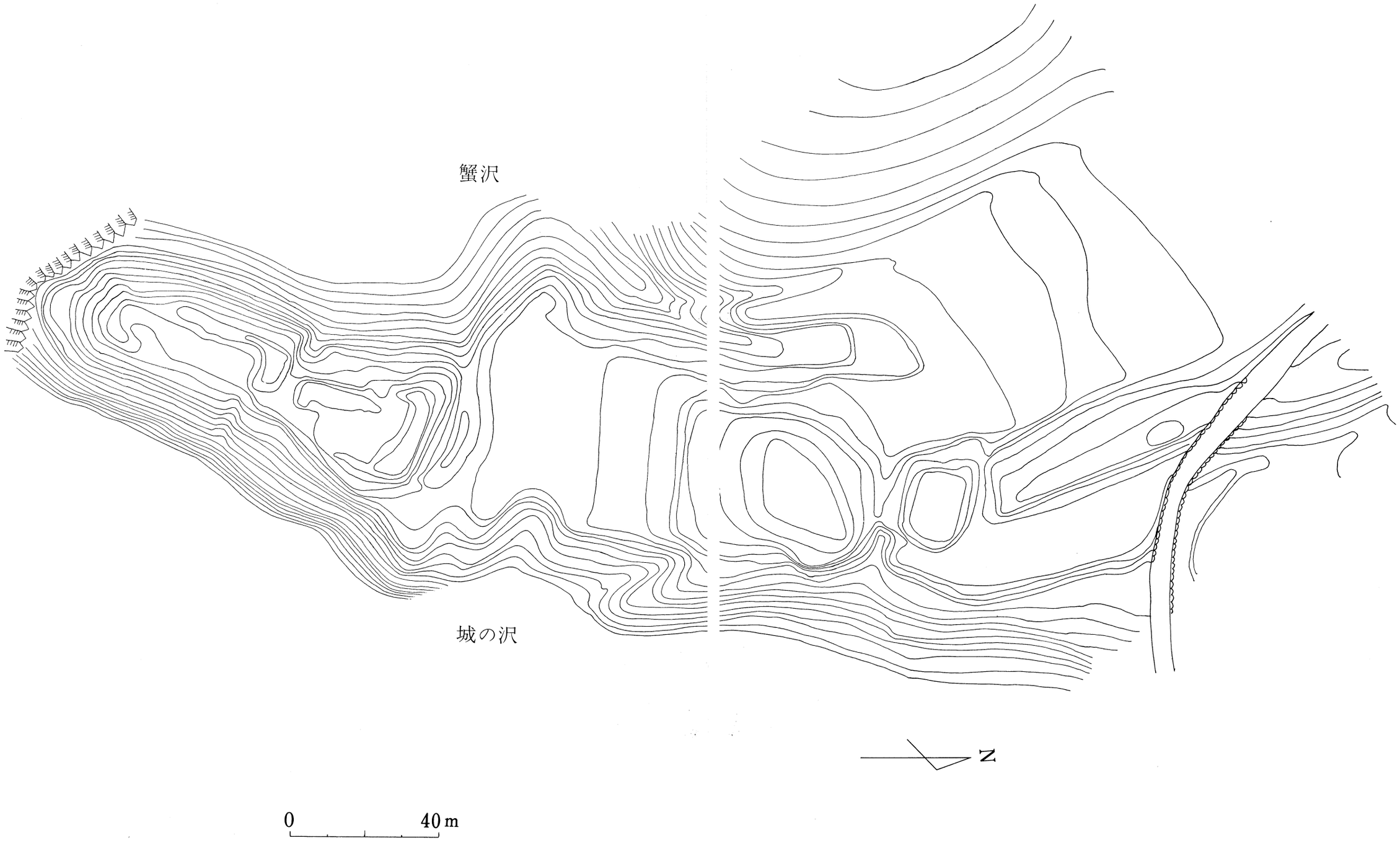


Fig. 4　笹尾塁跡測量図（等高線は１m間隔）

7　遺　構

Aトレンチ

Aトレンチ西側の北壁近くに、相互に接した状況で3つのピットが検出されている(Fig. 5)。P－1、P－2は長楕円形、P－3は円形のプランを持ち、第3層を掘り込んでいる。NS1トレンチ近くにはP－4があり、第2層下部から掘り込んでいる。東側部分でもNS1トレンチ近くにはP－5があり、第3層中部からの掘り込みである。なおAトレンチでは、土塁基底部を調査し、第3層のうえに石列を確認している。

Bトレンチ

Bトレンチの土塁基底部付近から集石が検出されたが、Aトレンチでも同様なものが確認されており、土塁基底部を堅固にするための施設と思われる。

Cトレンチ

Cトレンチの土塁基底部は第4層中に石列が検出されている。この第4層は土塁の表面をおおっている土層で粘質がある。Cトレンチでは第3層より集石が検出されている。ここでは第1層直下が第3層であるが、集石より東では第3層が欠如し、第2層直下に第4層がある複雑な様相を呈す。

Dトレンチ

Dトレンチは、最も多くの遺物が出土しており、なかでもトレンチ中央部にある大きなすり鉢状を呈したピットP－6のふく土中からそのほとんどが出土している。また、焼土は確認されなかったが、多量のカーボンも遺物と伴出している。このピットの西にP－7、東にP－8がある。P－8より東側には礫の集中がみられた。この礫群をおおうような堅い面が部分的に確認されたが、同様なものがEトレンチ、NS2トレンチでも散発的に検出されている。

PL.14 土塁基底部石列(Aトレンチ)

PL.15 ピットP—6(Dトレンチ)

PL.16 溝状遺構 D—4(NS1トレンチ)

Eトレンチ

Eトレンチ西側では、土塁の北端にあたる部分に土塁の基底部を囲むように石列が検出された。さらに、内部に10cmの大きさの石が入っているP－9が検出された。NS 2トレンチをはさんで両側には、大小の山石からなる集石が1.5mの幅で存在している。これらの石をおおうような状態で、Dトレンチで検出されている堅い面が部分的に確認されたが、セクションでは明確には把握できなかった。しかし、第2層下部あるいは第3層上部に存在するものと考えられる。

NS1トレンチ

このトレンチでは、D-1～4の4ヶ所の溝状遺構が検出された。いずれも東西方向に走るものと思われるが、この内部からはピット等は確認されなかった。D-2はセクションでは把握できず、そのためピット状のものと思われる。Bトレンチ際へサブトレンチを入れたが、その時点で、ピット

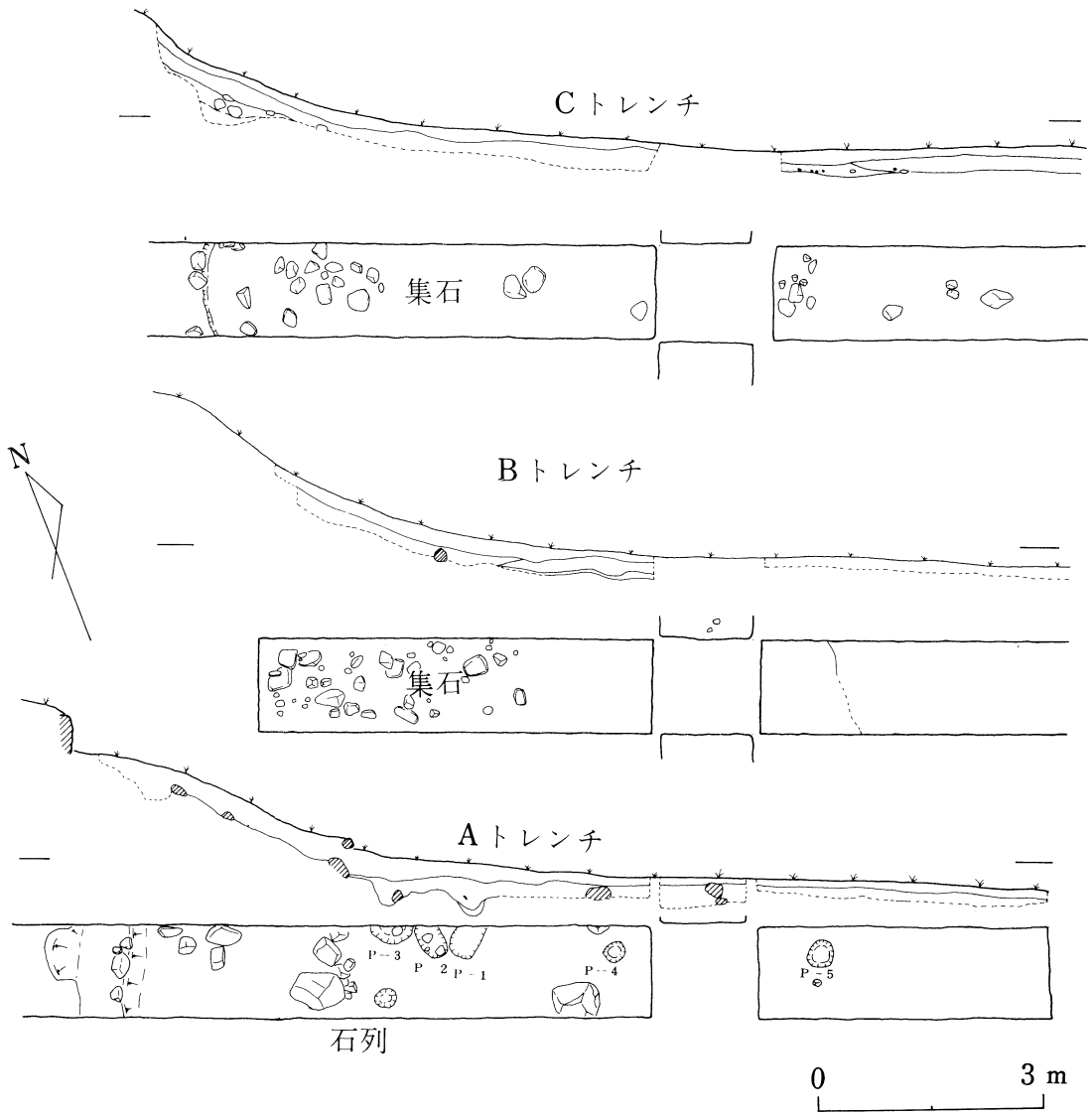


Fig. 5 遺構図（A・B・Cトレンチ）

状のものP－10が壁にかかって検出された。またBトレンチの付近には第1層と第2層の間に粘質のある土層が厚さ約1cmで存在した。ピットはP－11、P－12、P－13の3個が検出されたが共に円形である。P－13は表土からの掘り込みであるため、攪乱と考えた。

NS2トレンチ

北側の土塁内側斜面に2段の石列が検出されたが、これは各トレンチの土塁基底部で確認されているものと同様な性格なものであろう。トレンチ全面で、E、Dトレンチ付近で検出されているものと同様な礫群（集石）が検出され、これに伴い堅い面が若干確認されたが、広がりはつかめなかった。

石積み

Ⅱ郭東土塁内側に2～3段の石積みが存在していた。大小の石を不規則に積んだものである。

Ⅰ郭南土塁、東土塁内側には、4～5段の大きな石を規則正しく積んだ石積みが検出された。北面の石積みをまず築き、その東端をおおうように直角方向の西面の石積みが構築されたものである。

（八巻与志夫）

遺構一覧表

遺構名	トレンチ	大きさ (cm)		
		長径	短径	深さ
P－1	A	30	35	21
P－2	A	35	25	8
P－3	A	45	－	20
P－4	A	22	20	21
P－5	A	30	30	49
石列	A			
集石	B			
集石	C			
P－6	D	96	90	20
P－7	D	40	31	29
P－8	D	24	20	4
石列	E			
P－9	E	52	40	10
集石	E			
溝状遺構1	NS1	上幅 35	下幅 22	
〃 2	NS1	上幅 30	下幅 22	
〃 3	NS1	上幅 35	下幅 20	
〃 4	NS1	上幅 40	下幅 25	
P－10	NS1			
P－11	NS1	10	10	
P－12	NS1	10	10	
P－13	NS1	30	30	
石積み	Ⅰ郭			
〃	Ⅱ郭			

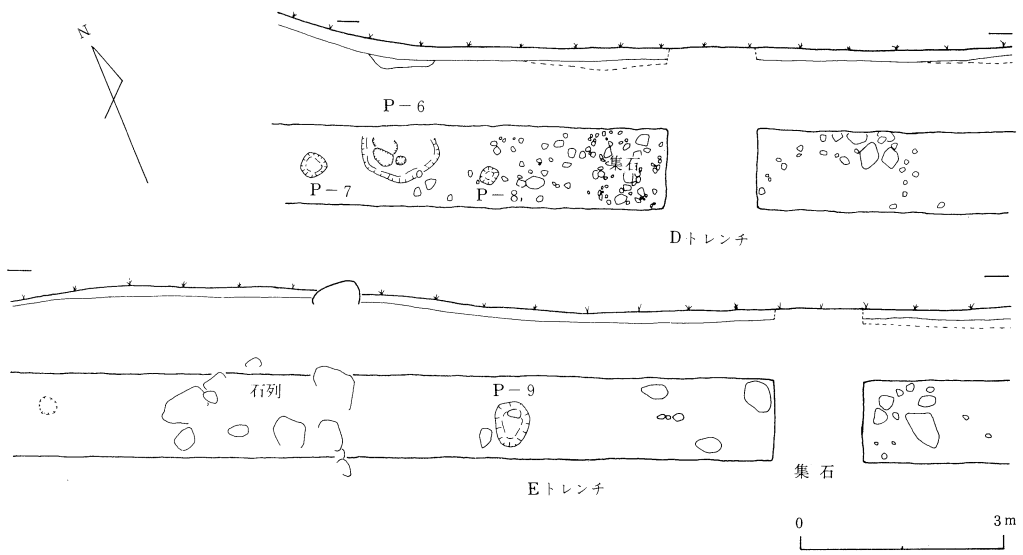


Fig. 6 遺構図（D・Eトレンチ）

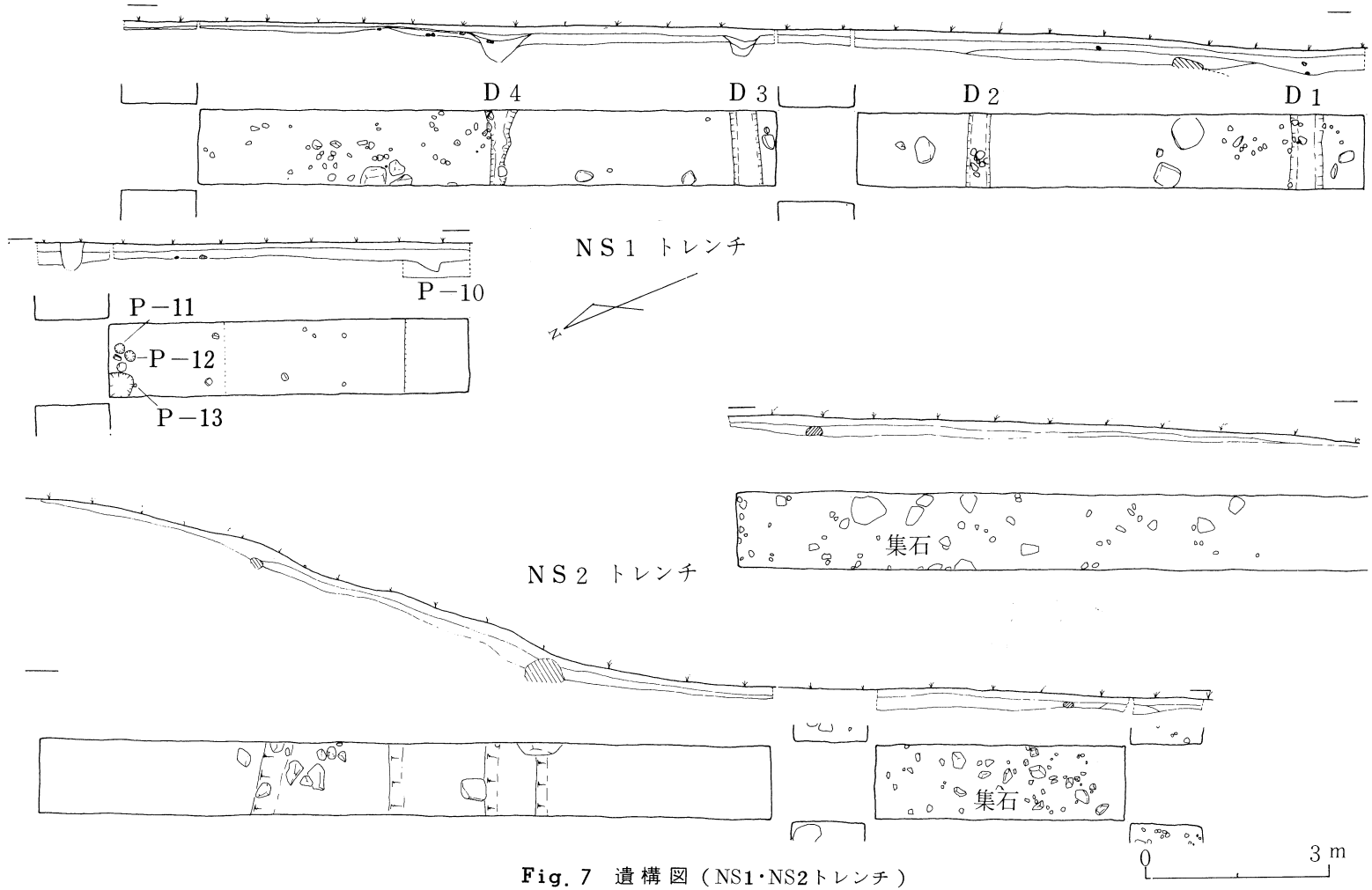
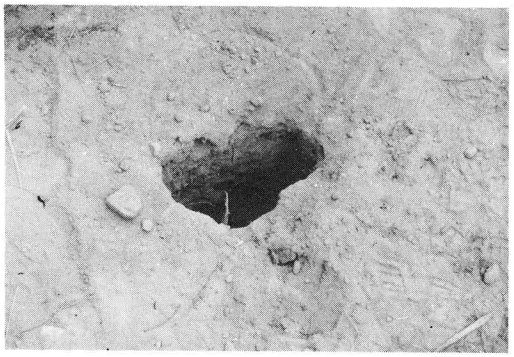


Fig. 7 遺構図（NS1・NS2トレンチ）

PL.17 Ⅱ郭東側土塁基底部石積み

PL.18 Ⅰ郭南・東側土塁石積み

PL.19 土塁基底部石列（Cトレンチ）



PL.20 ピットP—5（Aトレンチ）

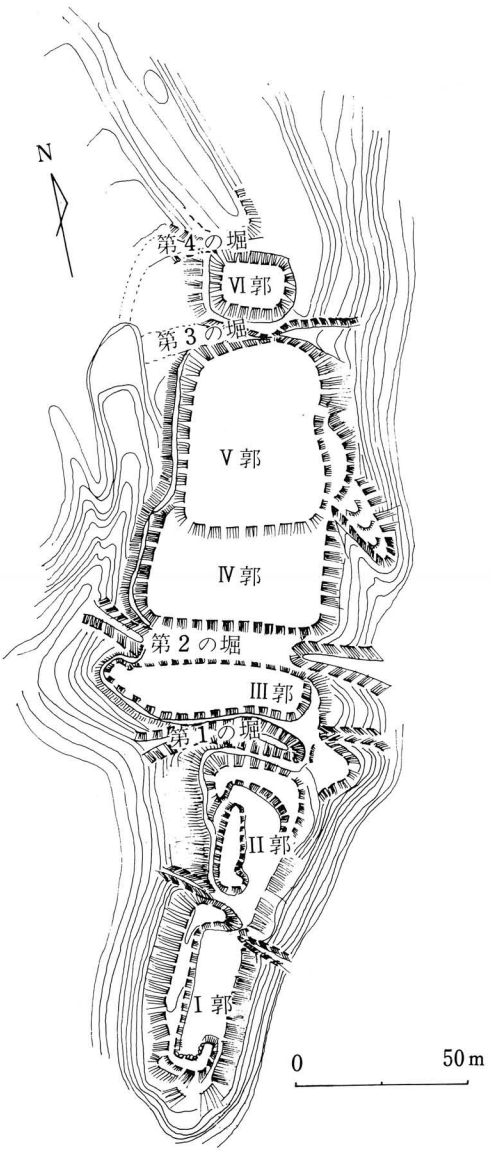


Fig. 8 笹尾塁跡概念図

8　遺　　物

Ⅰ郭・Ⅱ郭ともに出土遺物はそれ程多くはない。そのうちⅡ郭の出土遺物が全体の3分の2以上を占め、Ⅰ郭からは、ほとんど遺物は出土していない。Ⅱ郭もDトレンチからの出土遺物がそのほとんどである。

遺物は、土師質土器、雑器、溶融物付着土器、磁器、古銭、金属製品、石臼等である。なかでも土師質土器がその大半である。

土師質土器　（かわらけ）

Ⅰ・Ⅱ郭ともに出土があったが、特にⅡ郭Dトレンチからは多く検出された。概して焼成は良く、硬質であり、技法的・形態的にも大きな差異はない。全般的に口縁部は玉状をなさず、底部からの立ちあがりを維持している。また、底部には糸切痕が見られるが、比較的粗雑である。

器形のわずかな差から2つのグループに分類することが可能であるので、以下それぞれの特徴を述べたい。

第1種土器（Fig. 10. 1～6）

比較的大きく、口径12cm前後であり、胎土は赤褐色で、金雲母を含むものが多い。器形は、底部から大きく開いて立ち上がり皿状を呈する。器肉は比較的薄く、内面に媒の付着しているものが多い。出土した土師質土器のほとんどがこの種のものである。

第2種土器（Fig. 10. 7～9）

比較的小型で、口径8cm前後であり、胎土は黄褐色で、雲母を含むものは少ない。器肉は比較的厚く、底部から丸味を帯びて立ち上がる。媒の付着しているものは少ない。

雑　　器

薄手、厚手の2種類がみられ、薄手のものはおそらく鍋形をしたものと思われる。（Fig.10.10）底部付近は熱を受けたためか、もろくなっており、全体に赤味を帯びている。

厚手のものは器形を推測することは困難だが、かなり大型の器と思われる。焼成は良く硬質である。以上はすべてⅡ郭より出土している。

PL.21 石臼出土状況

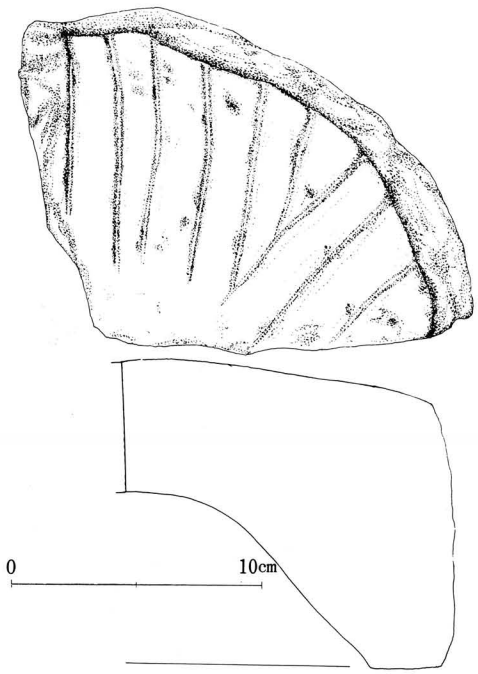


Fig. 9　石臼実測図

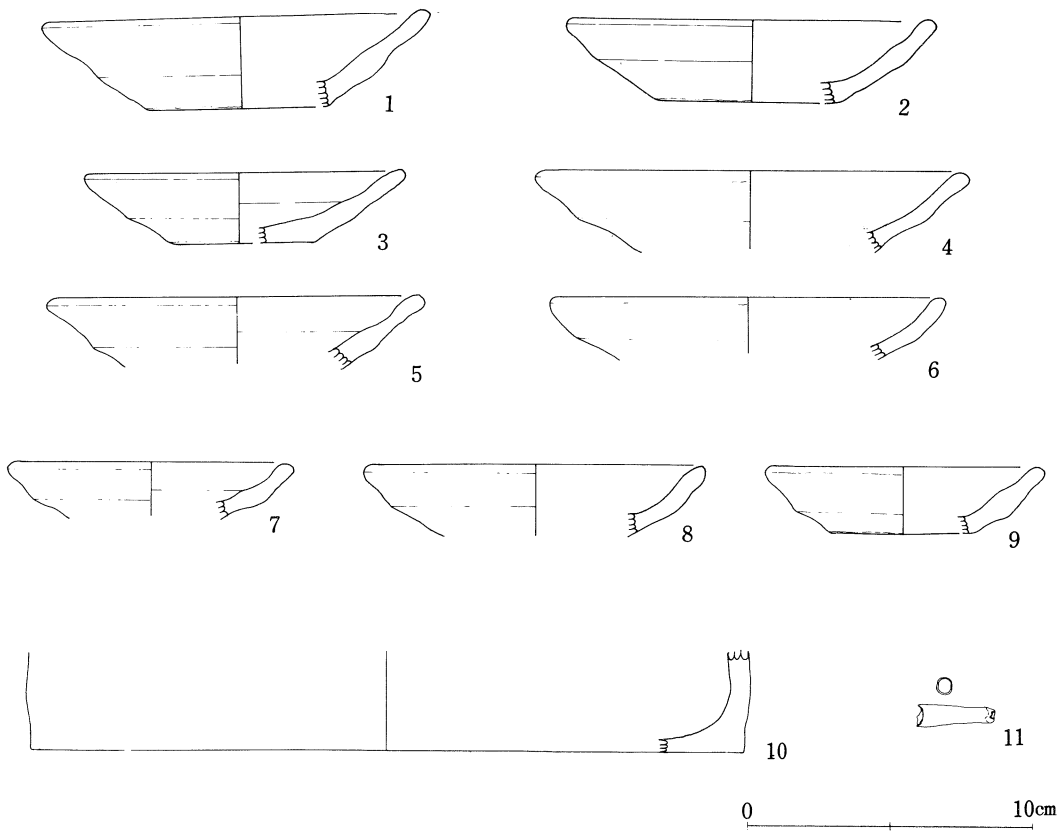


Fig.10　出土遺物実測図

1～9　土師質土器　10　雑器　11　金属製品
（1.3～10 Ⅱ郭Dトレンチ　2.11 Ⅰ郭Aトレンチ）

溶融物付着土器

土師質土器に高熱の金属溶融物が付着したため変質し、硬質化（陶器化）して灰白色を呈した土器である。Dトレンチから2片出土しているが、いずれも皿形土器である。最近多くの城館址から出土の報告があり、冶金関係の遺物と推測されている。

磁　　器

Ⅰ郭のAトレンチから染付の小片が検出されている。存続時期の把握のための重要な遺物のひとつであるが、小片のためにわかには判断しがたい。

金属製品（Fig. 10.10）

キセルの吸口である。銅製で竹に続く部分は欠損している。Ⅰ郭のAトレンチより出土した。

石　　臼（Fig. 9）

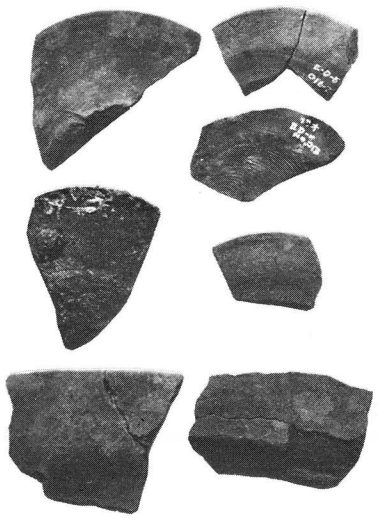
多孔質安山岩の石臼で、8分画6～7条かと思われる。NS1トレンチ内の石積み中に混入していた。下臼であり、底をほりくぼめてはいるが、溝の状態からみて穀臼と思われる。

古　　銭

Eトレンチから出土した「寛永通宝」である。古老の話によると、かって出土地点に祠があったということで、おそらくそれと関連したものと思われる。

出土遺物一覧表

雑　器	43片	38.7 %
土師質土器	63片	56.8 %
溶融物付着土器	2片	1.8 %
磁　器	1片	0.9 %
金属製品	1片	0.9 %
石製品	1点	0.9 %
計	111	100 %
内訳		
Ⅰ郭出土遺物		
土師質土器	33片	94.2 %
磁　器	1片	2.9 %
金属製品	1片	2.9 %
計	35	100 %
Ⅱ郭出土遺物		
雑　器	43片	56.6 %
土師質土器	30片	39.5 %
溶融物付着土器	2片	2.6 %
石製品	1点	1.3 %
小　計	76	100 %



PL.22 出土土器

9　まとめ

笹尾塁跡にかかわって実施した、周辺地域の調査、測量調査、発掘調査の成果と問題点について述べてみたい。

周辺地域の調査

本塁跡の周辺には、「屋敷」「堀の内」などの地名が比較的多く残されている。これらの地名が時間的にも、機能的にも直接本塁跡と結びつくものか判断しがたいが、「御所」「御蔵屋敷」などについては勝沼町所在の勝沼氏館跡などにもみられ、領国支配の一つの姿が上笹尾、下笹尾の地域に想定される。したがって、本塁跡がその機能の一端を担うものとして位置づけられていた可能性もあり、今後、より詳細な調査を行う必要性を感ずる。

測量調査

測量調査によって本塁跡の構造（縄張り）上の特徴点がいくつか明らかにされた。

以下に列記すると

1. 塁跡は舌状台地上に郭を連郭式に配している。
2. 第1の堀は尾根線に対して「く」の字状に屈曲させている。
3. Ⅰ・Ⅱ郭へ入るためには土橋を用い、それを東隅の台地縁辺部に設けている。
4. Ⅰ郭・Ⅱ郭は土塁のみによって区分している。
5. Ⅰ・Ⅱ郭の土塁は幅も広く、しかも高いものとなっている。郭の内部で占める割合は大きい。また、東側ではⅡ郭の半分ほどまでに低い土塁が存在するだけである。
6. 土塁上には櫓が設けられていたと考えられ

る個所も存在する。

7. Ⅰ・Ⅱ郭への出入は、形式の異なる二つの入口が用いられていたと考えられる。

これらには、地形に制約された本塁跡個有の特徴もあるであろうが、たとえば本塁跡のように、土塁が郭の一部で終結している例をみると、たとえば、

勝沼町勝沼氏館跡	台地縁辺部
同　岩崎氏館跡	台地縁辺部
甲府市武田氏館跡西部	平坦地
同　要害城跡	山　頂
同　要害城南遺構	尾　根
須玉町獅子吼城跡	山　頂

などにも見られ、築城にあたってある種の共通性がうかがえるものもある。

発掘調査

遺　構

土塁については、基底部付近や中位に石積みが使用されている。このように土塁に石積みを使用した例をみると、

甲府市武田氏館跡	永正16年
同　要害城跡	永正17年
同　要害城南遺構	永正17年以降
同　湯村山城跡	大永 3 年
勝沼町勝沼氏館跡	

などが知られ、時期も武田信虎に関係した城館跡に多くみられる。しかし、県内の城館跡の大多数が未調査のままであり、これをもって本塁跡の性格を明らかにすることはできないが、一つの課題を提示するものである。

郭内部の遺構についてながめてみると、検出された土坑はⅠ・Ⅱ郭ともに土塁に近接しており、また、Ⅰ郭の溝址は郭の主軸に対し直交するものが多いなど、郭内部が機能的に区分されていた状況をうかがうことができる。なお、柱穴状のピットが検出されたことは、これを用いた建物等の建造物が設けられていたことを示している。

遺　物

Ⅰ・Ⅱ郭を通して出土した遺物をみると、雑器、土師質土器、磁器、金属製品、石製品、溶融物付着土器等と比較的多種におよんでいる。なかでも雑器、土師質土器などは遺物全体の9割以上を占めている。また、Ⅰ郭とⅡ郭の遺物を比較してみると、雑器に大きな差があり、郭の機能の違いをあらわしているようである。　（田代　孝）

＊　＊　＊

≪調査団組織と調査参加者≫

顧　問	上野晴朗	佐藤八郎	服部治則
団　長	田代　孝		
副団長	早川方明	渡辺礼一	
調査員	飯島善時	出月洋文	折井忠義
	小野正文	数野雅彦	川口純一
	桑原　敏	小林正彦	小池　剛
	佐藤　元	土屋政司	鳥居寿美男
	畑　大介	萩原三雄	室伏　徹
	矢崎順子	山根弘人	八巻与志夫
	渡辺文仁	渡辺孝子	

地元協力者

下笹尾地区城山発掘調査協力団

事務局

小淵沢町

小淵沢町教育委員会

編 集 後 記

以上、本塁跡の調査について述べてきたが、本県では中世城館址の発掘調査例は五指に満たない状況であり、特に山城的性格をもつ城の調査は初めてといえる。したがって、この調査で得られた資料は大変重要なものであり、今後の研究に資するところ大と言える。

また、調査はきわめて短期日であったため多くの課題を残したまま終わらざるを得なかった。発掘調査の面からは、Ⅰ・Ⅱ郭以外の郭と想定される地域や堀などの広範囲にわたる調査がさらに必要であろう。そして、本塁跡に関して残されている伝説、記録などの面からも綿密な検討も重要である。今後とも中世城館址の調査研究の進展の中で、笹尾塁跡の歴史的位置づけも深まることであろう。

なお、調査にあたっては、小淵沢町当局、教育委員会並びに地元下笹尾の皆さんに多大なご協力をいただいた。末筆ではあるが、深甚なる謝意を申し上げる次第である。

（田代　孝）

発掘参加者

1979年3月31日

発行　小淵沢町教育委員会
編集　笹尾塁跡発掘調査団
印刷　ヨ　ネ　ヤ　印　刷